〔2〕解析法自体に問題はないが、解析途上資料の処理方法に問題がある場合。

近年水文学、推測統計学の発展により、資料の処理方法に問題点がある事が明らかになりつつあるものもある様である。筆者は今後モデル流域を想定し、降雨と流域条件を与えて流出量を推定し、解析方法の有効性と鋭敏性を確め、試験流域でチェックしていく予定である。今後共御指導をお願したい。

註1)　平田徳太郎：水源地の流出機構

註2)　中野　秀章：森林治水試験に於ける水の研究の歩み。

註3)　岸原　信義：日流量一様性表示式の検討。

その他参考文献として既応の研究論文を利用させていただいた。

---

67. しいたけ生産林家の労働力構成上の特性

佐賀県林業試験場　小部　晃
実松　敬行

〔は じ め に〕

この報告は佐賀県のしいたけ生産について調査した集落のうち、新しい生産地である厳木町鳥越部落の場合、しいたけ栽培が各農家の米麦作の周辺部門として如何に導入定着し発展したかを中心にして考察したものである。

〔調査集結の概要〕

この集落は本県のほゞ中央部の天山（1.044M）をはじめとする山塊の間に位置し、標高500M内外の本県でも稀な高地集落で、役場所在地の厳木から起伏の大きな松浦川上流の峡谷を県道が腸羊と縫って、しいたけ市場の多久市迄15KM唐津市迄30KMの集落である。現在戸数は戦後入植非農家を含め16戸の小さな集落で、2・3男や女子の学卒者は大阪等に殆んどが就職している。耕地利用の特色として水田は1戸平均約1*ha*で山間集落としては比較的大きいこと、各農家相互で水田保有の偏差が比較的小さく平均化していること、階段状水田でも1*ha*当り90～100枚とかなり低い生産基盤であること等があげられる。これは古来水田耕作を中心に永い間封鎖的経済が行なわれてきたことを意味する。このような農家経営に所得増大のための周辺部門として、賃労、しいたけ、畜産、山林等がある。固定的就労である俸給は別として日雇賃労は林業労務と土建業だが、畜産は水田耕運農産物運搬のための和牛飼育から、近年耕運機の導入、畜産物価格の不安定性で、全農家が1～2頭に減少した。しかし昨年から農協による集荷販売体制の拡充で乳牛が導入しはじめた。林野は戦後水源林造成を契機として、また木炭坑木の需要減退で原野林転造林が推進され、平均5.6*ha*の農家有林はすぎ用材林を主軸に、大凡75%が人工林化したが大半が15年生以下の幼令林である。立木売却の伐期は一般的に30年だが一部23～25年の例もあり、各農家で林転造林のための広葉樹、まつ材の坑木売却も行なわれている。一方木炭原木用に造林されたクヌギでしいたけ栽培が24～25年に試みられたが、技術の問題で衰退し、さらに視察旅行の刺激を受け再度33年から自己保有のクヌギ、ナラ、シイを伐採し、数戸の農家による共同栽培も行なわれ、販売条件から収穫に先立ち共同販売のための乾燥施設が一基設置されて、しいたけ生産組合に全農家が結集した。

〔農家経営の周辺部門と家族労働力構成〕

このような周辺部門について各農家がどのような関心を持っているか、その経営型別に各農家の土地所有と家族労働力を列記したのが次表であるが、各経営型により農家経営の構成にかなり特色がみられる。すなわち土地所有についてみれば賃労型は水田0.6*ha*、林野3*ha*と小さく、水稲型は水田が1.27*ha*、酪農型は畑が、0.34*ha*と比較的大きい。労働力については、賃労型が最も少なく、山林型酪農型に次いで水稲型しいたけ型の順で多くなるが、量的な労働力構成人数と質的な年令でもしいたけ型が最も恵まれているのが注目される。労働力的に標準的で保守的な水稲を中心にして他の経営型をみれば水田面積で区分されている賃労は

各農家の経営概要

経営の特性		土地所有 水田	普通畑	林野	(うち原野)	家族労働力 父	母	息子	嫁	換算実労働力計	備考
		ha	ha	ha	ha	才	才	才	才	人	
賃労型	1	0.60	0.24	3.8	0.2	—	—	47	42	1.5	俸給職人
	2	0.60	0.10	2.5	0.5	—	—	44	43	1.5	
	平均	0.60	0.17	3.2	0.4	—	—	(46)	(43)	1.5	
山林型	3	0.90	0.14	5.6	0.6	—	—	46	38	1.5	
	4	0.92	0.20	4.0	—	—	67	44	37	2.2	
	5	1.08	0.20	5.5	0.5	62	58	34	35	3.0	
	6	1.18	0.25	6.0	—	—	52	30	31	2.3	
	平均	1.02	0.20	5.3	0.3	(62)	(59)	(38)	(35)	2.3	
酪農型	7	0.98	0.28	4.4	1.0	—	—	40	38	1.5	
	8	1.40	0.40	11.0	1.0	—	66	39	37	2.2	
	平均	1.19	0.34	7.7	1.0	—	(66)	(40)	(38)	1.9	
しいたけ型	9	1.02	0.22	4.6	0.6	61	53	33	33	3.1	不時栽培
	10	1.10	0.21	7.8	—	57	51	27	23	3.2	〃
	11	1.17	0.21	7.5	0.5	60	53	26	21	3.2	〃
	平均	1.10	0.21	6.6	0.4	(59)	(52)	(29)	(26)	3.2	
水稲型	12	1.10	0.17	3.0	0.8	65	59	24	22	3.0	嫁：俸給
	13	1.13	0.29	4.4	1.0	63	65	45	41	2.8	母除き日雇
	14	1.40	0.21	7.0	1.0	68	66	37	33	3.0	
	15	1.45	0.20	7.3	0.3	71	—	35	33	1.9	
	平均	1.27	0.22	5.4	0.8	(67)	(63)	(35)	(33)	2.9	

別として、山林は考え方が保守的な点水稲に類似しているが、経営主体が壮年であること。酪農は労働力の点山林と同様だが先取的で畑、原野の面積が大きい。しいたけとの関係については先取的である上、労働力の点では前述したとおり殊に質的面でより恵まれている。

以上のことから鳥越部落の生しいたけ生産は、恵まれない1*ha*前後の水田耕作を基盤として、恵まれた労働力の農家で発展してきたが、これは小規模生産者の場合比較的近い多久市場への出荷で婦女子が当れるが大規模の場合比較的大きい唐津市場迄の出荷が、青年層を中心にしてバイクで出荷可能かどうかにかゝっている。すなわち多久市迄は耕運機でも1時間、唐津迄はバス利用で1時間40分、運賃140円だが、バイクでは40～50分と出荷販売上にかなり差があるからである。

今後しいたけ栽培と労働力構成上の条件を克服し、水稲型をはじめ不時栽培による規模の拡大をはかるためには、当面集落全体の出荷販売体制の整備拡充をする必要がある。